

【論 説】

インターネットと「過激化」についての考察

インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

樺 島 榮 一 郎

1. はじめに

2002 年ごろにはじまる、第二次世界大戦後の日本社会では見られなかった規模と範囲でのナショナリズムの高まり¹⁾を受けて、日本のナショナリズムや右傾化をどう考えるべきか、という議論が多くみられるようになった。初期のものとしては、1960 年代からの若者の世界観の変遷をたどり、2000 年代のインターネットにおける右傾化に言及した北田 (2005) や、インターネット上での右傾化の実態調査を行った辻 (2008) がある。この動向をさらに加速、拡大し第二段階とも呼べるような状況の契機となったのが、安田 (2012) であろう。丹念なルポによって明らかにされた「在日特権を許さない市民の会」(在特会) の会員の様子や、過激なデモの様子、在日コリアンなどに対する罵倒の言葉は、多くの人に衝撃を与えた。これにより、さらに多くの右傾化に関する本や論文が出版されるとともに、在日コリアンに対する意識に焦点をあてるもの (高・雨宮・杉森 (2015) など)、ヘイトスピーチを規制するべきかという議論 (師岡 (2013) など) などにもその範囲が広がった。さらに、安田 (2012) などに対する保守側からの反論と読めるもの (古谷 (2013) など) なども出版されている。ここで取り上げた以外にも非常に多くの書籍や研究が出版されている²⁾ が、これは 2015 年の集団的自衛権に関わる安保法制の改正における左派と右派の対立によってもたらされた面もあろう。

上記の既存文献を整理すれば、右派、特にインターネットで積極的に右派的

観点から発言をしたり、インターネットで同じ立場の人との繋がりを獲得する、いわゆるネット右翼とされる人々の属性や生き立ち、その思想についての分析、ということになろう。つまり、近年の日本のナショナリズムの高まりを、それをおこなっている人を対象に、属性や生き立ちや思考などの面から理解しようとした研究や考察ということになる。

これは確かに重要であるが、筆者は、もっと広い、異なる視点からの研究を提示したい。すなわち日本のナショナリズムの高まりは、ステレオタイプ化された敵というカテゴリをつくり出し、それを殲滅するための行動を行うという、近年、世界的にみられる思考の傾向の日本における一形態だという視点である。ステレオタイプ化された敵に対する過激な攻撃の例としてはイスラム国（以下、The Islamic State of Iraq and Syria の略語である ISIS を用いる）が挙げられよう。彼らは、占領した地域の異教徒や、アメリカを中心とした有志連合諸国を敵とみなし、その殲滅を目指して無条件に攻撃するのであり、そこに妥協が伴う交渉の余地は見られない。日本のネット右翼と呼ばれる人々は、韓国や中国、在日コリアンを敵とみなして、デモなどの抗議活動やインターネットでの書き込み、動画などによる攻撃を行う。幸いなことに、日本ではテロなどの物理的な手段を使った攻撃は抑制されているが、物理的手段を除いたなかで、可能な攻撃をしていると言えよう。こういった状況は、韓国における過激な反日派も同じだ。敵の存在を常に意識することと、それを殲滅するために行動することが、自らの集団、人のつながりの主な存在意義となる。このような思考は、敵の存在に寄りかかって自らのアイデンティティや行動を決めるものであり、自立したもの、自律的なものとはなり得ない。

そして、このような、ステレオタイプ化された敵のカテゴリを意識し、攻撃するという思考は、インターネットというメディアの特性により強められ純化されたものだと考えられるのである。これまでも、ISIS がインターネットによってリクルートをおこない、世界中から志願者をシリアに集めているだけでなく、アメリカやフランスなど敵としている国の住民に現地でテロを行うように仕向けている、日本のネット右翼はインターネットにおける情報に触れるこ

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

とで、ネット右翼になり、人的ネットワークを獲得するといった例が報告されているが、筆者は、そのようなインターネットの利用のあり方や広報戦略を論じたいのではない。それよりも、もっと根源的な面について、すなわちインターネットというメディアの特性が人間の思考のあり方や認識を変化させたということを論じたいと思うのである。

メディアが人間の思考を変えるという考え方は、言うまでもなく「メディアはメッセージである」という言葉で説明される、マクルーハンの提出した概念である。マクルーハンは、この概念を、代表作である『グーテンベルグの銀河系』（McLuhan 1962= 1986）と『メディア論』（McLuhan 1964=1987）のさまざまな部分で、さまざまな書き方で、何度も繰り返し書いているので、多少分かりにくい。マクルーハン自身がまとめているところを引用すれば、メディアや技術は「徐々に完全に新しい人間環境を生み出すものである」（McLuhan 1964=1987:ii）ということになる。このアイディアの始まりは、『グーテンベルグの銀河系』の主題である、印刷という新しいメディアにより人間は視覚を特に強調するようになり、それまでの音（音声）による情報伝達とは異なり、感情の伴わない均質化した分析的思考、分割的思考が可能になった、という部分だろう。マクルーハンの本が分かりにくいのは、その著作自体が分析的思考、分割的思考へのアンチテーゼとして書かれているからだと考えられる。また、それに付随して、たとえば情報の流通が容易になり中央集権が強まったこと（McLuhan 1962= 1986:178）、ナショナリズムや国民意識が出現したこと（McLuhan 1962= 1986:303）など、さまざまな面での社会の変化についての言及がちりばめられている。

マクルーハンが何度も強調しているのは、メディアの形式こそが新たな環境をつくり効果を決定するのであり、内容は問題ではないということだ。たとえば、こんなことを述べている。「「メディアはメッセージである」というのは、電子工学の時代を考えると、完全に新しい環境が生み出されたということを意味している。この新しい環境の「内容」は工業の時代の古い機械化された環境である。新しい環境は古い環境を根本的に加工しなおす。それはテレビが映画を根本的に加工しなおしているのと同じだ。」（McLuhan 1964=1987:iii）「映画

の「内容」は小説や芝居や歌劇である。映画という形式の効果はプログラムの「内容」と関係がない。書記あるいは印刷の「内容」は談話であるが、読者は書記についても談話についてもほとんど完全に無自覚である。」(McLuhan 1964=1987:18) メディアの形式が重要で、内容は問題ではないというマクルーハンの主張は極論であり、全面的にそうは言いきれないと思うが、メディアを考察する上で非常に有益な視座となることは間違いない。

この視点から見ると、現在の問題として指摘した、想像の敵に対する攻撃、それを行うための連帯という思考パターンも、実はインターネットというメディアの性質により生み出されたものではないだろうか。それでは、どのようにインターネットというメディアの特性は、人間の思考を変えたのだろうか。インターネットはそれを閲覧し書き込む人（つまりユーザー）にある種の行動を要求し、それに伴ってある種の思考パターンを要求する。これが人の思考をある程度規定しているのではないか。すなわち、インターネットでの議論に要求される行動の様式から、思考のあり方を考えてみるということが本論文の主題となる。

本論文の構成は以下の通りである。第二章で、インターネットがなぜ、またどのようにして人に能動を強いるのかについて論じる。第三章では、無数の選択肢のなかから、自らの納得できる「真実」（解釈）を能動的に「発見」することに伴う、人の感情について論じる。第四章では、インターネット上の動画の力について言及する。第五章では、一瞬の判断に基づいてすぐに書き込みを行う必要があるインターネットにより、分類（ステレオタイプ化）と、単純化された自らの主張を繰り返し書き込む行動と、その影響について論じる。第六章でこれまでの議論のまとめと、指摘したインターネットの性質がもたらす社会の変化、それへの対応を論じる。

2. 能動

インターネットをメディアとして見ると、その際立つ特徴の一つとして、伝えることができる情報量に（ほぼ）制約がないことが挙げられる。これは、イ

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

インターネットの通信の仕組みによるものである。インターネットは、情報を分割して宛名を付けてランダムに送信するという単純な仕組み（データグラムと呼ばれる）により構成されていて、電話における交換機のような通信網を統制する巨大で費用のかかる特殊な装置を必要としない(村井 1995:31)。このため、汎用性に優れ、有線（ネットワーク回線、ケーブルテレビ回線、電話線など）、無線（無線 LAN、衛星通信、携帯電話など）、光回線など、様々な設備と通信方法をインターネットとして使うことができる。また、インターネットは、元来、いくつかの私有のネットワークを接続するネットワークとして作られたことから（浜野 1997:130）、インターネット全体を管理する管理者は存在せず、公表されている通信ルールに従えば、誰でも接続できるように作られている。この2つの特性から、インターネットには次々と新しい回線が付け加えられ、その情報量も急速に増加してきた。この特徴は、インターネット以外のメディアと比較するとさらに明確になるだろう。たとえば、テレビやラジオは免許制により、放送できる事業者は限定されていて、新たな事業者の参入はめったに許されない。新聞や出版、音楽（レコード）、映画などは免許制ではないが、その流通は長年にわたって私有財産の組み合わせで築かれたものであり、現在の産業のあり方、流通量などに最適化されているため、流通量を増加させる新規参入はなかなか難しい。既存のメディア企業は、いずれもこの情報（コンテンツ）を消費者に送り届けることができる情報量に限りがある流通を管理し、どの情報を流通させるかを決める一方で、消費者は、その流通以外の方法で情報が入手できない。つまり、既存のメディア企業は、限られた資源である情報流通のゲートキーパーであることが、ビジネスの源泉となっているのである。

インターネットでは自由な増設や参入により回線が増加し、それに伴い流通する情報量も増加し、日々刻々と新しい web ページやサービスがインターネット上に現れる。その全貌を誰も知ることはできないだろう。ポータルサイトなどの多くの人が繰り返し閲覧する web ページであっても、非常に多くの選択肢（リンク）が提供され、その下の何層もの階層にもそれぞれ非常に多くの選択肢があり、それが刻々と変化している。これは既存のメディアでは見られな

い状況である。そして、利用者は選択肢を選択することが非常に容易なので、人はその都度、どの選択肢を選ぶのかを能動的に気軽に決める。その選択で得た情報をさらに知るために検索を行う、または興味あることを検索しその結果から選択を行う。インターネットを見ることは、たとえ暇つぶしであっても能動的な絶え間ない選択の連続であり、その組み合わせの数の多さを考えると、天文学的数字と言ってもよく、全く同じ情報を見ている者は誰一人としていないだろう。たとえ利用者に意識されていないとしても、利用者の能動性により、インターネットでの体験は個々人ごとにユニークな体験となっているのである。

3. 発見

このようなインターネットの無数の情報を能動的にたどっているうちに、人はそれまで知らなかった何かを「発見」をする。これは、誰も把握できないほどの膨大な数の web ページが存在し、検索やリンクを使って低い検索費用で次々と web ページを見ることができる、インターネットならではの現象である。このような「発見」はコンテンツの種類が限定され多くの人が同じものを見ているテレビや映画、新聞などのメディアでは起りにくい³⁾。また、比較的多くの種類が流通している書籍や音楽では「発見」があるが、それらを検索して実際に購入し試聴するためには費用がかかるため、このような「発見」を行うのは専門家や一部のマニア層にとどまる。インターネットにおいては、多くの利用者が膨大な情報がまだ人に知られずに存在すると感じていて、その中から自分が真実だと感じたり、驚きを感じるページを「発見」することが可能になっているのである。たとえば、30 代の OL が在特会に出会う過程が、以下のような形で表現されている。

「彼女もまた、ずっと以前から在日や朝鮮半島の「横暴」に腹を立てている。だが、友人や家族にそこを訴えても相手にされない。彼女いわく、周囲は「新聞に書いてあることを素直に認めてしまう人間ばかりだった」という。だから

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

ネットのなかで不満をおつけた。ネットのなかで「真実を発見」した。めぐり合ったのが在特会だった。入会し、街宣に参加してみれば、同じような不満を抱えた人間とリアルに知り合うことができた。職場や家庭では話すことのできない本音を、仲間と共有することができたのだった。」(安田 2012 87)

通常の「発見」であっても「発見」には十分に喜びと興奮を伴うが、特にインターネットにおける「発見」は、より大きな喜びと興奮、さらには「発見」に対する愛着をもたらす。普段の現実と、ネットで提示される認識のギャップが大きければ大きいほど、驚きとともに真実を見つけた、発見したという感覚は高まる。一方で現実とのギャップが大きいほど、それを真実と信じられる人の数は少なくなるわけだが、それを信じられる人にとっては大きなインパクトになる。

また、少数の意見であればあるほど、現実の社会で同じ考えの人を見つける確率は低くなり、考えや物の見方などを共有した経験は少なくなるだろう。ところが、細分化され、日本だけでなく世界中の人が参加しているインターネットでは、非常に少数の意見や物の見方であっても、同じような考えの人を見つける可能性が非常に高くなる。それまで孤独だったゆえに、このインターネット上での「発見」は、インターネット利用者の心を強くつかむ。ましてや、この「発見」は自分で能動的に行動した結果なのである。このようにして、インターネットの利用者、特に少数の立場にあったものは、インターネット上での自らの「発見」に強い愛着を持つ。また、同調者を求める運動は、少数であっても熱心な参加者を増やそうと考えれば、より過激な主張をおこない、ハードルを上げ、それでも共感できる人を見つけようとする。これらの結果、インターネットの無い時代には同じ世界観、価値観の人を見つけられず顕在化しなかった少数意見がアソシエーションとして顕在化することとなる。第一の過激化の仕組みは、メディアとしてのインターネットの性質に根ざすこのような「発見」によるものである。インターネットの絶え間ない拡張、拡大は日々、刻々と知られざる情報を生んでいる。それが真実であるかどうかはともかく、利用者の

このような「発見」は今後もさらに増加するだろう。

3. 動画

「発見」の喜び、興奮、愛着は、動画でさらに強められる。

映像の影響力の強さは古くから、社会心理学をはじめとするさまざまな研究で指摘されている。古典的なところでは、Bandula らによる、映像を通じて他者の体験を観察することにより暴力傾向が強められるという一連の研究（Bandula・Ross, D.・Ross, S. A. 1961）（Bandula・Ross, D.・Ross, S. A. 1963a）（Bandula・Ross, D.・Ross, S. A. 1961b）、Gerbner らによる長時間のテレビ視聴により暴力傾向が高まるとする研究（Gerbner・Gross 1976）などがある。また、歴史やメディア政策などを見ても、第二次世界大戦中は、各国が主に自国民に向けて数々のプロパガンダ映画を製作し国民を戦争へと駆り立てた経験から、ほとんどの国でテレビ放送には、政治的な中立などの、他のメディアにはない強い規制が課せられていることが指摘できる。

言うまでもなく、インターネットは、テキストだけでなく、画像、音楽、映像など、あらゆる形態のメディアを包含する。そして、これまでの研究などが示す通り、動画（インターネットにおける映像を一般に動画と呼ぶので、以下では動画の語を用いる）を利用することで、人に対する説得力を高めることができる。そのため、多くの同調者の獲得を必要とする政治運動において動画は積極的に用いられるようになった。

表1 安田（2012）における在特会もしくは関連団体への参加のきっかけ

年齢	肩書き	職業	活動きっかけ	ページ
49	在特会広報局長	小さな出版社勤務	ネットの情報などで、だんだんと本当のことを知ようになった	40
29	福岡支部会員	OL	2ちゃんねると『嫌韓流』で在日特権を知る。入会のきっかけはカルデロン一家抗議デモ動画	60
32	大分支部会員？	大分県内で農業を継ぐ	悶々とした気持ちを抱えていたときに、ネット上で桜井の動画と出会う	67

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

39	大分支部会員？	自動車整備士	桜井の演説動画を目にしたことが在特会入会のきっかけになった	69
28	北海道支部会員	OL	強い影響を与えたのが、チャンネル桜と在特会。なかでも在特会の動画	73
30 後半	北海道支部長	デザイン会社経営	(もともと保守的) ネットで在特会の存在を知り、迷うことなく入会する	77
14	宮城支部会員？	中学 2 年	ネットを閲覧で「在日や左翼の悪行を理解」し 在特会の存在を知って入会した	82
27	宮城支部長	地元銀行勤務	桜井会長の動画や著作に接したこと	84
30 代	宮城支部	OL	ネットのなかで「真実を発見」した。めぐり合ったのが在特会だった。	86
47	チーム関西メンバー	北新地でバー経営	ネットで在特会を知った。	119
40	在特会副会長	家業の電気工事業	入った動機は、やはりネットの動画サイトで桜井の演説を視聴したことだった。	125
42	チーム関西メンバー	元建設会社勤務	小泉訪朝、拉致問題がきっかけ。本を読み漁った。保守系の学習会に何度も足を運んだ。	131
24	在特会会員	植木屋で働きながら DJ	留学先の寮で、在特会のサイトを眺める	134
N/A	在特会福岡支部副会長	美容室経営	政治活動とは無縁だったがネットによって在日への憎悪を膨らませた	191
57	チーム関西元まとめ役、その後会を離れる	N/A	ネットで特在会を知り、街宣を見て解放区を感じ感動	226
32	在特会元会員、チーム関西主要メンバー	運送集配センターアルバイト	カルデロン一家追放デモ動画がきっかけ	314
34	在特会協力者	洗車業	2ちゃんねる。ネットのおかげで、情報が捻じ曲げられていることを知った	332
58	元在特会関西支部長	学習塾経営	「反日教組」を入りに口、さまざまな保守運動に関わる	339

筆者作成、安田（2012）で、在特会への参加の経緯が明らかになっている会員の情報を整理したもの

ISIS は、twitter などの SNS で活発な宣伝活動を行っている⁴⁾が、もちろん動画にも非常に力を入れている。現代の戦争におけるメディア利用、プロパガンダの主戦場は、インターネット、特に SNS と動画へとその中心が移りつつ

ある。これまでも戦争時におけるメディア利用は、米西戦争（1989）や第一次世界大戦における大衆新聞、第二次世界大戦のラジオ、映画、ベトナム戦争のテレビ、湾岸戦争における衛星・ケーブルテレビのニュース 24 時間放送、アフガニスタン・イラク戦争のアルジャジーラ TV など、常に最新のメディアが焦点となってきたことを考えると、現在、もっとも新しいメディアであるインターネットの動画が利用されるのは当然のことであろう。現在は、ISIS だけでなくアメリカ政府も ISIS に対抗する動画を投稿し、動画のプロパガンダ合戦の様相を呈している（Allendorfer・Herring 2015）。

日本においても動画の力は強い。安田（2012）は、繰り返し動画について言及し、在特会の運動における動画の重要性を指摘している。表 1 を見ても、動画をきっかけに在特会に参加したという会員は多い。その様子を安田（2012）は以下のように描写している。

（2012 年当時の会長の桜井が攻撃的で憎悪に満ちた街宣スピーチを行うことに関して）「動画サイトにアップされる桜井の映像には、ときに数万という再生回数がつき、その一挙手一投足に、いわゆるネット右翼と呼ばれる者たちが「支援するぞ!」といった賛辞のメッセージを寄せる。若者が在特会へ入会するきっかけとなるのは、こうした「動画を観て」というケースが圧倒的に多い。つまり桜井の視線の先には、振り上げる指先の向こう側には、パソコンに向かって快哉を叫ぶ多くの若者の姿がある。

在特会の組織拡大の原動力となったこの“動画戦略”は、ネット掲示板への投稿と並んで、会設立時から一貫したものだ。いわばネットの持つ力が在特会を世間に知らしめたのである。」（安田 2012:33）

「彼もまた、ネットで桜井の演説動画を目にしたことが在特会入会のきっかけになったと語る。「動画の力はすごいですよ。ストレートに言葉が伝わってきます。僕はじめて在特会の動画に接したときは衝撃を受けました。（中略）」必死になってネットをたどり、在特会の動画を見まくった。」（安田 2012:69）

それ以前にマス・メディアであった新聞が文字という比較的感情的と切り離して時間をかけて吟味できるゆえに論理的であったのと比べ、19世紀にその技術的な起源を持つ映画は、視覚と聴覚に直接訴えかける、情動的で非論理的な面が強い感覚的なメディアと言われる。また、そういった映像を一度に多くの人に見せることができるテレビが非常に強い影響力を持つということも、ほとんどの国でテレビ規制の前提として共有されている。インターネットの動画は、映像を何度でも、手軽に個人で視聴できるという既存のメディアにはない特性がある。このことが、新しいものの見方を「発見」し共鳴する個人に浸透する大きな要因となっている。インターネットは新しいメディアであり、その内実や影響力の結果についての知識が利用者に蓄積されていないことから（利用者が擦れていないとも言える）、その評価は極端に高いか低いかの両極端になりがちである。本論文でとりあげるような過激化に向かう人びとは、社会やそれを形成しているテレビや新聞などの既存メディアに不満を抱いていることが多いのに対して、インターネットは、既存メディアが報じない「真実」を直接当事者から聞くことができるなどとして、大きな希望と高い評価を抱えていることが多い。これらの要因が、前節で指摘した自分で「発見」したという思いと複合して、動画の威力を一層高めるのである。

4. 分類と反復

インターネットというメディアの性質により、文字による議論の仕方も大きく変わった。インターネット以前の文字における議論は、新聞や書籍、雑誌、場合によっては手紙を使ったものであった。議論の当事者は、十分に時間をかけて入念な長文を書き、それをもう一方の当事者が読むまで手紙や新聞の場合であれば数日、書籍や雑誌などの場合であれば数週間から数か月の時間がかかった。そして、それからもう一方の当事者は、やはり十分に時間をかけて入念な長文を書き、時間をかけて発表するということが続く。そして、幸運にも双方にとって有益な結論に達する場合もある。このような議論のあり方は、基

本的に新聞や書籍に文章を載せることができるエリート層に限定されたものであった。この様子は、書簡集などに明確に見ることができる。

これに対して、インターネットにおける議論は瞬間的で反復されるものである。インターネットにおいても、上記のような時間をかけて長文をやり取りする議論も存在しないわけではない。最近は学会誌や専門誌がPDF ファイルでインターネットで公開される場合が多いし、専門的なブログの間で議論が行われることもある。しかし、これはインターネット以前の議論と同様に専門家に限定されている。ここでインターネットの議論として焦点をあてるのは、インターネット上の議論の大部分を占める、掲示板やコメント欄でのやり取りである。この議論には、あらゆる人々が参加可能で、その影響力も大きく、インターネットの特性が強く出ている。実際、匿名掲示板の2ちゃんねるが日本のインターネットの文化やネット右翼の成立に大きな影響を与えてきたことは、多くの文献が指摘するところであるし（たとえば（濱野 2008）、（伊藤 2015:50-59））、表1を見ても、2ちゃんねるをきっかけとして、在特会に参加したものが存在することが分かる。また、Youtube やニコニコ動画などの動画サービスだけでなく、facebook などの SNS サービス、Amazon などの販売サイト（この場合はレビューと呼ばれる）、Yahoo! ニュースなどのニュースサイトなど、インターネットのあらゆるサービスに広がっているコメント欄で行われる議論もプレゼンスを増している。掲示板やコメント欄での議論の特徴を整理すれば、短文化、条件反射的な繰り返しと分類、が挙げられる。

（1）短文化

短文化とは、文字通り書き込む文章が短くなることである。よく2ちゃんねるなどでは、「長すぎ」「最初の〇〇だけ読んだ」「どこを縦読みすればいいの」⁵⁾という書き込みが見られる。英語でもインターネットの略語として、TLDR もしくは tl ; dr (Too long. Didn't read.) という表現が多用される。長いといっても7,8行を超える程度で、字数にすると200字程度であっても、このような反応が見られる場合がある。書き込む方もこのような読み手の反応を知っている

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

ので、「長文すみません」「長文スマソ」などと最初か最後に書き込むことが多い。Yahoo! ニュースのコメント欄のように、「そう思う」のクリック数の多さにより表示されるコメントが決定される場合には、長い文章もしくは理解が難しい文章は、敬遠されデフォルトの画面に表示されなくなってしまう。

実は、この短さは、文章だけに見られるものではない。音楽は、配信での販売が中心となるとアルバムから曲単位となり、試聴は主たるフレーズ（サビ）のみになった。Youtube 上での音楽動画ファイルも多くが曲単位である。動画も多くが数十秒から数分で、映画やテレビ番組に比べると極端に短くなっている。インターネットというメディアは、すべてのコンテンツを小さくする傾向を持っているのである。

この理由は、他のコンテンツに切り替える手間が非常に低いこと、また早送りなどの時間のコントロールが容易であること、試聴する環境の違い、そもそもコンテンツが低価格か無料であること、が挙げられる。切り替えや時間コントロールの容易さは、読者・視聴者が少しでも飽きや理解の困難を感じたら、すぐに読み飛ばし、早送りされ、他のコンテンツに切り替えられることを示している。読者・視聴者の飽きのこないに留め置くためには、短時間にするのが最も容易である。環境の違いも大きい。テレビや映画は、自宅や映画館という周囲から切り離された比較的落ち着いた環境で、大きな表示装置で視聴される。これに対して、インターネットは一般的に、移動中や仕事などの空き時間などにさまざまな環境で、比較的小さい画面で視聴される。これも短時間で読み、試聴できるコンテンツが好まれる要因である。また、文章のやり取りに関して言えば、チャットのような環境で素早い返事が求められるので、文章が短くなるという指摘もある（Wallace 1999=2001:147）。

動画はもともと詳細に説明したり、論理を示すのに向いたメディアではないが、文章であつても短くなれば、書かれる内容も単純化されざるを得ない。条件による留保や、例外の記述などはもちろんのこと、プロセスの分析なども省かれて、結局、ステレオタイプにあてはめた結論だけが強調されることとなる

(2) 条件反射的な繰り返しと分類

インターネットのコメント欄は、情報量に限界がなく、永遠に流れるものである。一般的に、新たな書き込みがあれば、それが一番上に表示され、古いものは下に送られる。そこでは一時的に結論が見出される場合もあるが、新しいメンバーが書き込むとまた議論がはじまる。このような環境では、論理の正しさと結論が導かれることはなく、発言の数が多い方という印象で結論が決められる。これは一見すると多数決のように見えるが、インターネットにおける発言数は実人数ではなく、のべ発言数であることに注意しなければならない。つまり、ある問題に対して強い感情（多くの場合怒り）を抱いている人物が、時間を費やして何度も同じことを書き込む場合、特定の方向への発言が多いと感じられ、その方向に議論参加者が引っ張られることがある。実際、ISISのソーシャルメディアでの成功は、1日に50回から150回以上もツイートする、少数の特別に活発なユーザーにより支えられているという（Berger, Morgan 2015:29）。強い感情を持っている人が議論に強い影響を与えることがまた、過激化への一助となる。また、新しい発言が一番、見やすい場所に表示され、古い発言が表示部分の外に送られていく掲示板やコメント欄では、反対意見があった場合、すぐに投稿することで相手の意見の存在を弱めることができる。これらの要因から、結果として、素早く短文を数多く投稿するという戦略が合理的となる。そうなれば、相手の主張を検討したり、自分の考えを発展させるなどの時間はあまり取れず、条件反射的に自分の主張を繰り返し書き込むこととなる。

瞬間的で条件反射的な書き込みを行うためには、相手の書き込みの意図を瞬時に判断しなければならない。このため、インターネットのコメント欄、掲示板のやり取りには、決めつけや強烈的なステレオタイプが伴う。もっとも単純な判断の方法は、敵か味方かという非常に単純な分類を行うことだ。特定の主張、たとえばネット右翼の場合、民主党の政策を支持する部分があったり、中国や韓国に好意的な書き込みは左翼的であるとして敵と分類され、反撃や揶揄する言葉が書き込まれる。もっと極端な場合には特定の言葉、たとえば、平和や原

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

発反対、生活保護（の正統性）などという書き込みが1部分にでもあると、敵と分類され、即座に反撃の言葉が投稿されるし、たとえば在日コリアンがトップ級の地位を占めている会社など、多少の関係があってもやはり敵に分類されてしまう。これは、左派でも同じで（やや情熱が右派より薄い気もするが）、やはり安倍首相の言論など、特定の論点、言葉に即座に反応する。結局、単純化してでもつねに発言しつづけることだけが、次々に流れていくインターネットの速さの中で、自らを存在を人々に認識させ続ける条件なのであり、存在がなければ評価や議論の対象にならないのである。このように、相手をステレオタイプ化し、素早く自らの主張を延々と描き続ける行動が強いられることにより、その思考が硬直化し、自分たちが正しいという確信を強め、勝ちか、負けしかない、相手との交渉や妥協の余地はなく相手の殲滅によってのみ、自らの理想が実現される、という思いを強めていく。自らの発言による自家中毒と言ってもよいだろう。

山崎（2015：10-16）は、既存のナショナリズムが、新たな国民国家の形成や拡張、国民統合など、なにかを作り上げる方向であるのに対して、自分たちがマジョリティにもかかわらず被害者意識を持ち、「外国人労働者や観光客、少数民族、近隣諸国のみならず国際機関、政府、政党、マスメディア、官僚、警察、女性、若者、生活保護受給者、原爆脱原発運動、フェミニスト、他のナショナリスト、学校関係者、地域住民、障害者、反レイシスト」などの多様で不明確な、すぐに変わる敵の存在を強調し、それらをレイシズム的に排除して、国民の範囲の縮小をもたらすナショナリズムを「奇妙なナショナリズム」として、その原因をグローバル化と新自由主義に求めている。

しかし、これまでの本論文の視点を踏まえれば、山崎のいうところの「奇妙なナショナリズム」の出現の多くが、インターネットというメディアの性質によるということを指摘することができる。たとえば、被害者意識と敵の分類は表裏一体のものである。むしろ、先に敵を意識するからこそ、敵より我々が恵まれていない状況は間違っている、という被害者意識が出て来ると言ってもよいだろう。そして、その敵への意識や範囲は、インターネット上の議論のなか

で瞬時に形成される。特定の主張や言葉が分類のトリガーとなるので、山崎の言うように敵は、場当たりので容易に変化する。そして、敵への憎しみと怒りは、匿名という過激化しやすいインターネットという環境の中で、何度も条件反射的に繰り返す書き込みにより、より一層高まり、単純な分類と相まって、敵のカテゴリーごと排除するしかないというレイシズムに陥るのである。山崎が原因とするグローバル化や新自由主義も否定するものではないが、非正規雇用の増大による生活レベルの低下により、敵と比較した際の被害者意識の形成に寄与するのであり部分的である。やはりインターネットの議論における自家中毒の方が「奇妙なナショナリズム」の性質をより直接的に説明できる。

5. おわりに

これまで、インターネットのメディアとしての性質が人々を過激な思想に導くという仮説を、能動、発見、動画のインパクト、分類と反復という、4つの要因から論じた。しかしながら、インターネットのメディアとしての性質が、さまざまな場所と思想・運動において現在起こっている過激化をすべて説明するものではないことは明らかである。過激化する考え方を「発見」し、共感する人々は、現状の社会や自分のあり方に不満を持ち、全く別の世界の解釈を潜在的、もしくは意識的に求めており、既存の研究で行われてきたように、属性の研究は有益であろうし、同じ過激化にしても1950年代から1960年代に見られたような左傾化ではなく、なぜ右傾化なのかを理解するためには、北田(2005)のような社会における思想や解釈、態度の移り変わりを研究することも有益であろう。ただ、ここで改めて指摘したいのは、そういった背景が実際に過激なコミュニティとして活動、運動の形として現われてくる過程には、明らかにインターネットというメディアの特性が重要な役割を果たしており、その仕組みについての知識が不足しているということである。

インターネット以前のメディアにおいては限られた人によって議論がなされていたのに対して、インターネットにより非常に多くの人々が議論に参加できるようになったが、広く一般の人が参加する多くの場合、インターネットとい

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

うメディア性質によってもたらされるのは、のべ発言数による印象であり、論理の死であり、細分化、過激化である。ここにさまざまな問題が発生するが、代表的なものとして国民国家とテロの問題を取り上げる。

かつて、マクルーハンやアンダーソンは、印刷、とくに、一度に多くの読者に同じ情報を届け、同じ時間と人々の繋がりを感じさせる、新聞や小説が国民国家をつくったと主張した（McLuhan 1962= 1986 212, 224, 245, 254）（Anderson 1991=2007）。であるならば、無限の選択肢とその容易な選択を可能にし、選択していくこととそこでの議論によって、それぞれの集団の意識を純化していく傾向を持つインターネットの時代においても、国民国家とそれを前提とした民主主義は存続し続けるのか、という疑問が当然、生じる。インターネットが形成するコミュニティの原理は、宗教、趣味、社会活動、技術など多様だ。インターネット上でのナショナリズムは、こういった多様な原理と並列のものへとなりつつある。世界各地で起こっている一部の人々のナショナリズムや宗教への過激な傾倒は、これまで生活のさまざまな部分を担ってきた慣れ親しんだ価値観の後退、もしくは相対化に対する危機感に根ざしている部分もあろう。安田（2012）には、周囲の人々の無関心を嘆く在特会会員が何度もでてくる（安田 2012:75-76, 78, 83）が、周囲の人々は罵倒などの過激な行動ゆえに関わりたくないという人もいるし、多様性ゆえに、他のことや違った価値観に関心がある人（それらは日本的な政治に関わりたくないという態度に根ざしているのかかもしれないが）も増加しているから、当然の反応であろう。これは個人や私的な集団の場合だが、多種多様な価値観、世界観を持ち、世界中に構成員を持つ国土空間に限定されない集団が増えた場合、国民国家と民主主義自体が過激な反応を示す可能性もあるのである。

そして、国家や宗教に対して強い期待を寄せている人も、国家や宗教の行うことに反対している人も、許容された手段では国家や宗教、何かの価値観を守ることができないと最終的に感じた場合（絶望した場合と言い換えてもよい）、物理的な手段を伴う行動を始める。この動きはインターネット以前の社会においても同じだが、インターネットによりさまざまな集団が形成され、それぞれ

の方向に先鋭化していくとすれば、様々な思想、宗教、政治などの状況から、このように感じ、暴力的な活動を志向する小集団が増加する可能性がある。その軸は、宗教やナショナリズムだけに限らず、たとえば自然保護や地域文化など、さまざまなものに広がる可能性を秘める。

テロを考えた場合、インターネットは単なる連絡手段やプロパガンダの手段である以上に、核心としてはそれ以前の環境では形成されなかったであろうテロへ向かう思想やグループを形成するという点において、インターネットというメディアとテロは密接な関係がある。インターネットはアソシエーション形成の閾値を劇的に下げたのである。これまでも、活字印刷の発明と宗教改革、それに関係した戦争、輪転機の発明による大衆新聞の成立と米西戦争や第一次世界大戦、ラジオや映画と全体主義や大二次世界大戦、テレビとベトナム戦争の停戦活動のように、新しいメディアの普及に伴い社会の混乱が起こってきた。どのようにしたら、インターネット時代にこのような混乱をなくすることができるのか、考える必要があるだろう。

ここ1～2年、動画投稿サイトやSNSの運営会社が、規約違反を理由にISISや在特会のアカウントを停止する例が出てきている。Twitterは、2014年9月ごろから、ISIS関連のアカウントの停止を始めている（Berger, Morgan 2015:34）。しかし、その効果は完全なものではなく、ISISの支持者の社会的繋がりを失わせることによってさらに孤立化し、過激化するリスクを高めることが指摘されている（Berger, Morgan 2015:58）。在特会は、ニコニコ動画の運営会社であるドワンゴから、規約違反を理由に公式チャンネルが削除されている（在特会 2016）が、引き続き個別の動画は投稿可能であることから、引き続きニコニコ動画に、活動の動画が投稿されていて、チャンネル削除の影響は限定的である。

現在のインターネットの影響力の強さは、結局、既存のメディアと比較して、人々がメディアとしてのインターネットを理想化し、インターネットに対して無垢であることによる部分が大きいだろう。ラジオなどの既存のメディアも、その登場後しばらくはそのような理想化と興奮（その一方であまり根拠のない感情的な反発）の状態が続いたが、時が経つにつれ、そのような熱狂が収ま

インターネットと「過激化」についての考察 インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか

り、メディアの影響力も低下していった。インターネットも、人々が冷静に評価し接することができるようになるまで、まだ、時間が必要であるのだが、それまでの間、どのような対策ができるのかということが今後の研究の課題となるだろう。

参考文献

- 伊藤昌亮 (2015) 「ネット右翼とは何か」 山崎望編『奇妙なナショナリズムの時代』 岩波書店、29-68 頁。
- 北田暁大 (2005) 『嗤う日本の「ナショナリズム」』、日本放送協会。
- 高史明・雨宮有里・杉森伸吉 (2015) 「大学生におけるインターネット利用と右傾化：イデオロギーと在日コリアンへの偏見」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』 66 (1) : 199-210
- 在日特権を許さない市民の会 (2016) 『【重要】公式チャンネル閉鎖に関するお知らせ』 <http://www.zaitokukai.info/modules/news/article.php?storyid=656>、accessed on January 12, 2016
- 辻大介 (2008) 『インターネットにおける「右傾化」現象に関する実証研究 調査結果概要報告書』 <http://d-tsuiji.com/paper/r04/report04.pdf>、Accessed on December 1, 2015
- 濱野智史 (2008) 『アーキテクチャの生態系 情報環境はいかに設計されてきたか』 NTT 出版。
- 浜野保樹 (1997) 『極端に短いインターネットの歴史』 晶文社。
- 古谷経衡 (2013) 『ネット右翼の逆襲―「嫌韓」思想と新保守論』、総和社。
- 村井純 (1995) 『インターネット』 岩波書店。
- 安田浩一 (2012) 『ネットと愛国―在特会の「闇」を追いかけて』、講談社。
- 山崎望 (2015) 「奇妙なナショナリズム？」 山崎望編『奇妙なナショナリズムの時代』 岩波書店、1-28 頁。
- Allendorfer, William H., Herring, Susan C. (2015) *ISIS vs the U.S. government: A war of online video propaganda* <http://firstmonday.org/ojs/index.php/fm/article/view/6336/5165> accessed on January 12, 2016
- Anderson, Benedict. (1991) *IMAGINED COMMUNITIES: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (1991 Revised and Expanded edition)*, Verso (白石隆・白石さや訳『想像の共同体 ―ナショナリズムの起源と流行』 書籍工房早山、2007)
- Bandula, A., Ross, D., Ross, S. A. (1961) "Transmission of Aggression through Imitation of Aggressive Models", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63 (3), pp.575-582.
- Bandula, A., Ross, D., Ross, S. A. (1963) "Vicarious Reinforcement and Imitative Learning", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67 (6), pp.601-607.
- Bandula, A., Ross, D., Ross, S. A. (1963) "Imitation of Film-mediated Aggressive Models", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66 (1), 3-11.
- Berger, J.M., Morgan, Jonathon (2015) "The ISIS Twitter census: Defining and describing the population of ISIS supporters on Twitter," *Brookings Project on U.S. Relations with the Islamic World, Analysis Paper, number 20*, at <http://www.brookings.edu/~media/research/>

- files/papers/2015/03/isis-twitter-census-berger-morgan/isis_twitter_census_berger_morgan.pdf, accessed 7 December 2015.
- Gerbner, G. and Gross, L. (1976) “Living with Television: The Violence Profile”, *Journal of Communication*, 26, pp.173-499.
- McLuhan, Marshall. (1962) *The Gutenberg Galaxy The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press (森常治訳『グーテンベルグの銀河系 活字人間の形成』みすず書房、1986)
- McLuhan, Marshall (1964) *Understanding Media The Extensions of Man* McGraw-Hill Book Company (栗原裕・河本伸聖訳『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房、1987)
- Patricia Wallace (1999) *The Psychology of the Internet*, Cambridge University Press(川浦康至・貝塚泉訳 (2001) 『インターネットの心理学』NTT 出版)

-
- 1) たとえば伊藤 (2015 40-41)、安田 (2012 44-46) など、2002 年に開催された日韓ワールドカップサッカーにおける韓国の応援のあり方、小泉首相の北朝鮮訪問により北朝鮮による日本人拉致が誰も否定できない形で明らかになったことを右傾化のエポックとする指摘は多い。
 - 2) 近年の右傾化に関する文献は、伊藤 (2015) の文献一覧が比較的詳細かつ包括的である。ただし、ヘイトスピーチに関するものは含まれていない。
 - 3) インターネット以外のメディアでは制作されてから時間が経過し、人々の記憶から忘れ去られた後に「発見」される場合があるが、これも研究者などの専門家に限られるだろう。
 - 4) 2014 年の 9 月から 12 月の間に、Twitter だけで少なくとも 46,000 の ISIS を支持するアカウントがあり、そのうち 500 から 2,000 のアカウントは 1 日当たり 50 以上のツイートを行う活動的なユーザーであった。(Berger and Morgan, 2015)
 - 5) 各文の先頭の文字を読むことを目的とした書き込みを「縦読み」と呼ぶ。たとえば
バカも休み休み言えよな
いい加減いやになったよ
くにもほんといいかげんだな
ほとぼりがさめるまで
しばし
いさづけよう

という書き込みを縦読みすると「バイクほしい」となる。このように縦読みを意図した文章はあまり意味を伴わず長くなる傾向にあることから、長い文章を揶揄して「どこを縦読みすればいいんですか」という表現が使われる